

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19520094
 研究課題名（和文）パンドルフォ・ペトルッチ時代のシエナ芸術研究—1500 年前後の芸術奨励政策—
 研究課題名（英文）Studies of Sienese Art under the regime of Pandolfo Petrucci—his *mecenatismo* about 1500—
 研究代表者
 上村 清雄 (UEMURA KIYOO)
 千葉大学・文学部・准教授
 研究者番号：60344959

研究成果の概要：1487 年から 1512 年の死まで中部イタリアの都市シエナを実質的に支配したパンドルフォ・ペトルッチがとった芸術奨励政策を、シエナ出身の教皇ピウス二世（在位 1458—1464）が主導した直前の時代と比較検討し、過去の芸術伝統と決別し、新旧世代の芸術家をたくみに使い分ける、いわゆる「ペトルッチ様式」によって、シエナに宮廷文化の確実な誕生を促した動向を、文献収集、実作品の調査、現地研究者との意見交換によって明確にした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
年度	0	0	0
年度	0	0	0
年度	0	0	0
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：美術史、ペトルッチ、シエナ、芸術奨励政策、宮廷文化

1. 研究開始当初の背景：

(1) 15—16 世紀イタリア・ルネサンスの教皇および君主たちがどのような芸術奨励政策をおこなっていたのかは、教皇ユリウス二世（在位 1503—13）およびレオ十世（在位 1513—21）時代をはじめとしてようやく本格的な研究が始められている。

(2) シエナのペトルッチ時代にどのような芸術奨励政策がとられ、好まれた芸術表現について、特に注目した研究は、セシル・H・クラブが 1995 年に刊行した論考以後、展覧会、刊行物によってようやくイタリア内外で注目がなされるようになった。

2. 研究の目的：

(1) 報告者は、ペトルッチ時代に、直前のピウス二世の時代におこなわれた芸術活動と比較して、芸術上の主要な施策、建築をはじめとする実現した具体的な作品、依頼をうけた芸術家を検討し、かれの芸術奨励事業を具体的にあとづけることを目指した。

(2) ペトルッチが求めた支配者像、実現を望んだ芸術表現、選択した芸術家を分析することで、この時期のシエナ芸術は、16 世紀イタリアで主流となる宮廷文化のきわめて早い例であることを明らかにすることをさらに目的とした。

3. 研究の方法：

(1) 2005年に生誕500年を迎えたピウス二世の業績を再検証する展覧会や印刷物が刊行されたことを好機ととらえ、この時代の芸術活動を、つづくペトルッチ時代の芸術奨励事業をあとづける具体的な比較例とし、フィレンツェのドイツ美術史研究所、シエナ大学およびシエナ美術品総監督局それぞれの図書室と写真資料室などにて文献と写真資料を収集する。

(2) 2005年に大著『ピウス二世とその時代』を刊行したシエナ大学助教授アレッサンドロ・アンジェリーニ氏をはじめとするシエナ美術を専門とする研究者と、ペトルッチ時代のシエナ美術の特質について、16世紀の宮廷文化との関係について意見交換をおこなう。

(3) フィレンツェおよびシエナの美術館、シエナ美術品総監督局修復室などにて美術作品の熟覧をなす。特にシエナ美術品総監督局と連絡をとり、現在非公開のパンドルフォ・ペトルッチ宮殿内部の調査を実施する。

4. 研究成果：

(1) 1980年代末から現在まで主に15世紀シエナのルネサンスを主題とする展覧会および出版物の刊行はそれ以前と較べてイタリア内外で飛躍的に増大している。

具体的には、1988年から87年にかけてニューヨークはメトロポリタン美術館で開催された「ルネサンスのシエナ 1420-1500」展にはじまり、1997年にイタリアで刊行され英語版もつづいて出版されたジュリエッタ・ケラッツィ・ディーニ、アレッサンドロ・アンジェリーニ、ベルナルディーナ・サーニ共著による『シエナ絵画』、同じくイタリアで2005年に刊行されたアンジェリーニ編集の『ピウス二世と諸芸術-フェデリーギからミケランジェロにいたる古代の再発見-』、同じくシエナで2006年に開催された「ピウス二世、都市、諸芸術-彫刻の『再生』：研究と修復」展、そして2007年ロンドンではナショナル・ギャラリーで開かれた「ルネサンスのシエナ 都市の芸術」展が主要な業績としてあげられる。

15世紀のシエナ美術はそれ以前のゴシック美術の伝統に連なる神秘的な表現を色濃く残し、同じ中部イタリアでルネサンス文化を開花させたフィレンツェが達成した、空間のなかに位置する人物像を合理的にとらえる造形表現とは異なる点が従来は強調されてきた。展覧会カタログおよび研究文献の収集と、イタリアの研究者との意見交換によって、15世紀シエナのルネサンスが注目されて

いること、そしてパンドルフォ・ペトルッチ時代のシエナ美術にも、宮廷文化の観点から高い関心が寄せられている研究上の動向を確認することができた。

(2) シエナ大聖堂ととりわけ洗礼堂の間近に位置するパンドルフォ・ペトルッチの宮殿、通称パラッツォ・マニーフィコは1504年から09年にかけて造営され、パンドルフォの住館として重要な政治、文化上の役割を果たした。内部装飾の中心をなすのは四階に位置する「聴聞の間」と「書斎」の二部屋の内部に施された装飾である。「書斎」の壁面上部にはギリシア、ローマの女神と「忠誠」や「賢慮」の寓意をあらわすそれぞれ女性の半身像が描かれていた。制作年は1504年から07年と考えられている。一方、「聴聞」の部屋には四面の壁面に古代文学に主題を採った各二場面、計八場面が描かれ、木製の天井には、パンドルフォの紋章を中心にそれを支える漆喰(ストゥッコ)で造形された小童が囲み、分割されたパネルのなかに「パリスの審判」など神話画が表現されていた。床にはさまざまな幾何学的なかたちをしたマヨリカ焼の陶製タイルが敷き詰められていた。タイルに残された年号からこの部屋の装飾は、パンドルフォの息子ボルゲーゼとアンドレア・ピッコローミニの娘でピウス二世の姪にあたるヴィットリアの結婚を祝って、1509年におこなわれたと考えられる。

現在はわずかに壁面の一部と壁面上部に渡された木製のコーニス部分に描かれたグロテスク装飾が残されている。「書斎」を飾った女神および寓意像の一部は現在アメリカのプリンストン大学美術館に所蔵されている。「聴聞」の部屋の壁面で現存する五場面はシエナの国立絵画館に収蔵されているのは二場面であり、残りは19世紀半ばにパリを経て、現在ロンドンではナショナル・ギャラリーに展示されている。壁面の間を区切った古代モチーフをあらわした端正な浮彫りが彫られたアントニオ・バリッリ(1453-1516)による木製の柱で、現存する作例はシエナ美術品総監督局内部に移動し、そして天井は1912年に外され14年にメトロポリタン美術館に移り、またマヨリカ焼の陶板で構成された床もロンドンではヴィクトリア&アルバート美術館に展示されている。

この二部屋の原状を解明しようとする最近の試みは、1982年のジョヴァンニ・アゴスティ、1990年のアゴスティとヴィンチエンツォ・ファリネッラの論考が知られているものの、アンジェリーニ氏から、それ以後の文献として2000年にシエナで開催され2002年に報告書が刊行された国際学会「シエナの住居」中に、サーニ氏およびフランチェスコ・クインテリオ氏の重要な論考があるとの教

示をうけた。また 2008 年 12 月にはシエナ美術品総監督局の許可を得て、同監督局長官のガブリエーレ・ボルギーニ氏、同研究官のアレッサンドロ・バニョーリ氏と一緒に同宮殿内部を精査する機会を得た。

同宮殿のこの二つの部屋はあわせて 6.26 × 6.78 メートルの広さであり、現在は内部がさらに全七区画に分けられているため、つましやかな空間という印象をうける。シエナ洗礼堂と反対側のペッレグリーニ通りに面する外壁も質素であり、唯一壁面を飾るのは、もともと馬をつなぐ輪留めから発展したブロンズ製の装飾金具である（現在複製に換えられオリジナルはシエナ市美術館に所蔵されている）。ペトルッチ家と同じく上層市民階級に属したシエナの名門ピッコローミ家やスパンノッキ家の宮殿が大理石による古代建築のオーダーを備えた壮麗な建物正面（ファサード）を備えているのとは対照的である。ペトルッチ宮殿内部を調査することで、君主の座につくことなく巧みな政治的手腕によって権力者の地位を維持した政治家としての周到な配慮が、パンドルフォ自身の宮殿の造営にも活かされている事実を確認することができた。

(3) ペトルッチ宮殿はジャコモ・コッツアレリ (1453–1515) がおそらく造営をおこなっている。そして、同宮殿の「聴聞」の部屋の壁画を装飾したのは、ルカ・シニョレリ (1444 頃–1523)、ピントゥリッキョ (1454–1513) そしてジロラモ・ジェンガ (1476 頃–1551) であった。シニョレリとピントゥリッキョは同じ中部イタリアでも、トスカーナではなくウンブリア地方出身の、生年からわかるように 50 歳から 60 歳になった、すでに名声をはせていた画家たちである。一方ジェンガはおそらく 30 歳にもなっておらず、マルケ地方のウンブリアの出身であった。前述のサーニ氏は「書斎」の残る壁画の作者としてジェンガの名前をあげている。

15–16 世紀のシエナではシエナ出身以外の画家は原則として作品制作に携わることはできず、よく指摘されるように、全イタリアに名声を博していたシニョレリとピントゥリッキョだからこそ例外が許され、またそれが認められるほどパンドルフォが権力を有していたという見方も可能である。しかしながら、ピウス二世没後から、パンドルフォの権力掌握の間に位置する 1470 年代後半に、画家、彫刻家、建築家フランチェスコ・ディ・ジョルジョ・マルティーニ (1439–1502)、彫刻家ジョヴァンニ・ダ・ステファノ (1444 頃–1502 まで記録)、そしてバリッリがウルビーノを中心とするマルケ地方に赴き建築や彫刻、寄木細工の装飾に従事した事実を考えると、パンドルフォの時代に逆

にウルビーノからジェンガが招かれ、パンドルフォ宮殿の壁画装飾を、しかもサーニの仮説が正しければ、多くの部分を担当したことは重要であると思われる。

1494 年にシエナの名門スパンノッキの当主アントニオは娘のアレッサンドリアを同郷のネーリ・プラチディに嫁がせ、同年にアントニオの弟ジュリオはローマの貴族メッリーニ家のジョヴァンナを花嫁に迎えた。現在、いまだ未詳の「グリゼッラの物語の画家」(1490–1500 頃活動)、マッテオ・ジョヴァンニ (1428 頃–95)、フランチェスコ・ディ・ジョルジョ・マルティーニ、ピエトロ・オリオーリ (1458–96)、ネロッチョ・ディ・バルトロメオ・デ・ランディ (1447–1500) が単独で、あるいは共同で描いた、アレクサンドロス大王、スキピオ・アフリカヌスのような古代の英雄、ユードイットなど旧約聖書に登場する女性をそれぞれ題材とする総計八枚の絵画作品は、この二つの婚礼を祝して制作されたと考えられる。現在、イギリスに一点、アメリカに四点、イタリアに二点、そしてハンガリーに一点それぞれ収蔵されているこれらの作品は、いずれもシエナ出身の画家たちの手になる点で、1490 年代当時のシエナの上層市民の芸術家の選択のやり方とは対照的である。たとえば、パンドルフォと同じシエナの上層市民階級の名門はシエナ外から芸術家を積極的に呼び寄せる。ピッコローミ家は、ラファエッロ (1483–1520) を伴うピントリッキョとミケランジェロ (1475–1564) を招聘し、パンドルフォの盟友アゴスティノ・ビーキはシニョレリをマルティーニと共同制作をおこなわせるために呼び、キージ家は 15 世紀末イタリアで最も名高いと評されたウンブリア出身のペルジーノ (1445/50 頃–1523) を招いている。スパンノッキ家も北イタリア出身のソドマ (1477–1549) を呼び寄せている。このように、1490 年代にシエナ以外の画家を積極的に招聘する戦略をパンドルフォが自らの宮殿の装飾に際しても用いている事実を検証し、例えばシエナ出身の彫刻家アントニオ・フェデリーギ (1438 から記録–83) を重用したピウス二世、つづく 1470 年代にマルティーニらをウルビーノへ赴かせ芸術制作をまかせた芸術動向とは異なることを明確にした。

(4) 1506 年にパンドルフォはシエナ大聖堂主祭壇を飾っていたドゥッチョ・ディ・ブオンセンニャ (1255 頃–1318/19) の両面祭壇画《マエスタ》を撤去させる。200 年近くシエナの人々の崇拜的であったこの作品に換わるものとして選ばれたのは、大聖堂の向かいに位置するサンタ・マリア・デッラ・スカラ病院に置かれていた、ヴェッキエッタ作 (1410–80) のキリスト像を先端に配した

ブロンズによる聖龕（タベルナコロ）であった。2007年のロンドン展でのカタログのなかで、ルーク・シイソンは、シエナ外で大成した芸術家を重用し、14世紀来のシエナ芸術の伝統と決別して、確立しようとした新しい市民伝統による芸術表現を「ペトルッチ様式」と命名している。

ピウス二世の時代にはもっぱら大理石の素材が尊重されたのに対して、シイソンは、大聖堂に新たに設置された聖龕が物語るように古代ローマ彫刻につながるブロンズの技法を好んだことも指摘している。もとより芸術家の折衷的な採用、中世の伝統との意図的な乖離、ブロンズの素材の愛用、これらはいずれも権力者が芸術に示す態度であり、ひとつの「様式」として統一できない。また、例えばパンドルフォが墓所と考えたシエナのオッセルヴァンツァ聖堂内にコッツアレリに制作させた《キリスト埋葬》の素材はテラコッタであり、ブロンズのみが称揚されたわけではない。以上の事実を指摘し、「ペトルッチ様式」の概念は慎重に用いる必要があるものの、16世紀にイタリア各地で開花する宮廷文化の基本的な要素をペトルッチ時代のシエナ芸術は体現していることを確認し結論とした。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

（1）上村清雄、「ヴェナンツォ・クロチェッティの芸術—イタリア彫刻の伝統と革新と—」、『ART LIBRARY』、査読無、8巻、2007年、11—16頁

（2）上村清雄、「シエナのルネサンス—アントニオ・フェデリーギ作《聖水盤》を事例として」、『ヨーロッパ近現代史における中心＝周縁関係の再編』（2005年度～2007年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書 研究代表者 小沢弘明）査読無、21—31頁

〔図書〕（計1件）

（1）上村清雄、『ラファエッロとジュリオ・ロマーノ—「署名の間」から「プシュケの間」へ』ありな書房、2008年、272頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

上村 清雄 (UEMURA KIYOO)
千葉大学・文学部・准教授
研究者番号：60344959

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし